

「嘆きの谷の向こうに」

詩篇 84 篇 6～8 節(新共同訳)

聖学院大学 人間福祉学部副チャプレン 左近 豊

今日はこの一年の間に逝去された客員教授 1 名、退職された先生方 3 名、そして皆さんのクラスメートでもあられた学生お 2 人を憶えて礼拝をささげます。キリスト教では亡くなった方を神として崇めることはいたしません。けれども、その方たちが地上に刻んでいかれた生涯をかけがえのない宝として大事に受け止めます。そして、お一人お一人がこの世に生きた証しを思い起こし、神様がこの方たちを私たちに出会わせてくださり、共に生きる時間を共有させていただいたことを神に感謝したいと思うのです。6 名の方々は、長い、短いの違いはあっても皆等しく、神様から与えられたこの世の旅を、力の限り歩み切って、天にある故郷へと召されてゆきました。

アフルレッド・テニスンというイギリスの詩人が、この世を去る時のことを船出になぞらえて詩にしています。「砂州を越えて」という詩です。砂州というのは大きな河や湾の入り口にある砂や岩でできた小さな堤防のことで、その内側には通常高波はこないのです。砂州は生死の分かれ目を表しているのでしょう。それを越えて行く先に死の世界が広がるのです。

Twilight and evening bell,	薄明、晩鐘、
And after that the dark!	そしてその後の暗み！
And may there be no sadness of farewell	どうか告別の悲しみがないように、
When I embark;	私が乗り込む時。
For though from out our bourne of Time and Place	なぜなら時や場所などという私たちの小河から
The flood may bear me far	さし汐が私を遠く連れて行くにしても、
I hope to see my Pilot face to face	私は私の水先案内に目のあたり遇うことを
	望んでいるのだもの、
When I have crossed the bar	私が沙洲を越えるとすぐに

(A.テニスン作 藤井武訳 「砂州を越えて」より抜粋)

黄昏時、晩鐘がなる夕暮れ、それは昼から夜へと移りゆく時です。その境目にあって、もう一つの境目、陸地と海の境にある砂州を越える時、光から闇へ、生から死へと深い断絶を越えて行く時、水先案内である神がすぐに導き手となってまだ見ぬ死の旅路へと伴ってくださる。未知の世界に神に導

かれて船出してゆくことを望み見ながらテニスはこの詩を詠んだのでしょう。自分に間もなく訪れる死を見つめ、死を動かしがたい現実のものとして受け入れた時、闇と告別の悲しみの先に新しい旅の始まりを見ていたのでしょう。テニスは、この詩を最後に数年後に世を去りました。最後の詩集の一番最後に遺言として、この詩を載せてほしいと言い残して。

テニスは聖書を深く読んでいた人でした。聖書も人の一生をしばしば旅になぞらえます。今日読んでいただいた詩編 84 編もそうです。故郷を離れ、なじみある家を後にして荒波にもまれながら、時に耐えがたいほどの試練に襲われて氣力を失い疲れ果ててしまいそうな道行があります。「嘆きの谷」を通らなければならない時があります。

「人生は失っていくもの、乳児は成長するにつれ、その道行きで失うことが始まる」と言った人のことを思い起こします。その人は 22 年間、最初は乳がんが始まって次々に身体のいろいろなところに癌が転移し、しだいに手の自由が利かなくなり、身体が動かなくなり最後は全身の骨にまで癌は広がってほとんど寝たきりになりました。22 年間のほとんどを癌の痛みとの戦いに費やしました。健康を失い、自由を失い、家族との団らんを失い、「人生は失っていくもの」と言ったこの人は、けれどももう一言付け加えていたことも私は知っています。「信仰のみが失うことのないもの」と。失ってゆく人生で失わないものがある、と。テニスが見ていたように命の絶え行くその後に始まる新しい信仰の旅を見失わない。そして残された家族にあてた遺言書にはこんなことを書いていました。私は癌に散々脅かされつづけてきたから、もうこんな残酷な苦しみをほかの人たちに味わってほしくないと心から願うので、私の魂が神様の御手に受け取られた後の体は、一生自分で大切にしてきたものですが、癌の撲滅のため、研究材料に役立ててくださることを願って大学病院に献体します、と。今は骨格標本となって東京女子医大で研究に用いられています。

一つ一つ失ってゆく「嘆きの谷」を通る時にも、この人は聴いていたのだと思います。「いかに幸いなことでしょう。あなた、神のうちに勇気を持ち、心の内に行くべき広い道を見ている人は」という聖書の言葉を。そしてテニスや聖書の詩人がはるかに見ていたように、この川から海への永遠の潮路に乗り出すその時に、私の水先案内が目の当たりに私を迎えてくださり、顔と顔を合わせて主なる神にまみえることを、この人ははるかに望み見えていたのだと思います。

この信仰をパウロはテサロニケ人への第一の手紙の中で「私たちが信じているように、イエスが死んで復活されたからには、同様に神はイエスにあって眠っている人々をも、イエスと一緒に導きだしてくださるであろう」(4:14)と語っています。神に召された時に、その行く道を導く水先案内である復活のイエスキリストに委ねる信仰が言い表されています。すべてを失いゆく中でも失われないものがあるのです。先ほど触れましたこの人の遺言書の結びの言葉を紹介して終わりたいと思います。遺される夫や家族一人一人に温かく心のこもった感謝と丁寧な別れの言葉のあとに書かれていたものです。それがこれです。

「天の体をもっても、お互いにわかりますよ。お先に行っています。さようなら」

「いかに幸いなことでしょう。あなたによって勇気を出し、心に広い道を見ている人は。彼らはいよいよ力を増して進み、ついにシオンで神にまみえるでしょう！」

祈ります。

私たちの水先案内であり、生きる時も、死ぬときも唯一の慰め主である主イエスキリストの父なる神さま、この一年の間、私たちの交わりから 6 名の方々をあなたの御許に委ね、お送りいたしました。先にゆかれたお一人お一人の歩みを憶えながら、この方たちを通してあなたがこの地上に刻まれた御業を感謝いたします。愛するものを見送り、哀しみの淵にあるご家族にあなたの慰めと支えをお与えください。この祈りを主イエスキリストの御名によってみ前におささげいたします。アーメン。

2011 年 11 月 9 日 聖学院大学 召天者記念礼拝